東京都青少年問題協議会
第３回若者部会
議事録

日　時：令和６年８月２６日（月曜日）
午前１０時００分～１１時２９分
場　所：第一本庁舎３４階北棟３４Ａ会議室

午前１０時００分開会

〇山本若年支援課長　お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから東京都青少年問題協議会第３回専門部会若者部会を開催いたします。

本専門部会は、東京都青少年問題協議会総会の運営規定に準じ、原則公開となっております。議事録につきましても同様の扱いとなりますので、ご承知おき願います。

次に、資料の確認をいたします。今回の資料につきましては、次第と事務局説明資料、また部会名簿の３点となっております。タブレットに表示されていますか。皆さま大丈夫ですか。よろしくお願いします。

それでは、このあとの進行は、土肥部会長へお願いしたいと存じます。土肥委員、よろしくお願いいたします。

〇土肥部会長　今日もよろしくお願いいたします。では、次第に従って進めさせていただきたいと思います。次第２の事務局説明に移りたいと思います。事務局から説明をお願いいたします。

〇栃折政策企画局計画調整担当課長　それでは、説明をさせていただきます。

政策企画局計画調整部計画調整担当課長の栃折と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、まず資料１から説明させていただきます。

今回の第３回若者部会におきましては、若者支援等に関する意見交換といたしまして、ここに表示させていただいております５つのテーマに関して、都において必要となる視点、都が取り組むべき方向性についてご意見をいただきたいと考えております。

東京都では、都市の活力の源泉は人であるということで、人の力を高め、人の力を引き出す人への投資というものを一層加速して、一人ひとりが主役になる社会を創りつくり上げていくことを目指しております。

そこで、今回の若者部会におきましては、この資料１で示させていただいております若者支援に関連した５つのテーマ、上から、

子育てしやすい東京の実現。

若者の声を聴き、あらゆる若者の成長を社会全体で応援。

世界に羽ばたく若者の育成。

若者たちがポジティブに働くことができる社会の実現。

誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京の実現。

この５つにつきまして、必要な視点、都が取り組むべき方向性についてご意見をいただければと考えております。

本日、この資料には、参考資料といたしまして、この次のスライド以降に、東京都の長期計画でございます「未来の東京」戦略の概要と、先日、８月２日に公表いたしました「重点政策方針２０２４」をお付けしております。こちらについても簡単に説明させていただきます。

まず、この参考資料の２「未来の東京」戦略の概要でございますが、こちらは、令和３年３月に策定いたしました東京都の長期計画でございます。

令和３年策定ということでございまして、コロナ禍から、持続可能な回復を遂げるという「サステナブル・リカバリー」の実現、こちらと課題の根源まで踏み込んで「構造改革」を押し進めるとといったスタンスのもとで、バックキャストの視点でしたり、多様な主体との協働など４つの基本戦略のもと策定いたしました計画でございます。

令和３年に、この「未来の東京」戦略本体を策定して以降、国際情勢の変化でしたり新たな課題の発生等々ございましたので、そうした社会の動き等を踏まえて、毎年戦略のバージョンアップというものを行いまして、成長と成熟が両立した「未来の東京」を目指して戦略を展開してまいりました。

この次のスライドです。今画面を共有させていただいておりますが、こちらは本年１月に公表いたしましたバージョンアップ２０２４で取り上げました若者施策の１例でございます。

このページにつきましては、一人ひとりの悩みに正面から向き合いまして、あらゆる分野で支援を充実していくということで、自殺総合対策の充実でしたり、多様な居場所の創出、また子供や若者に向けた支援等を重点的に取り組む施策を取り上げてございます。

こうした戦略のバージョンアップに向けて政策強化の方針として、毎年夏に公表していますのが、次のページからございます重点政策方針でございます。

１枚進んでいただきまして、このスライドでは、この重点政策方針の全体の考え方といたしまして、少子高齢化の進展でしたり、労働力不足や、国際競争力の低下または安全防災など、都としての政策全体に係る課題でしたり、都としての使命といったものを挙げさせていただいております。

また、次のスライドに進んでいただきまして、上から４つ目です。○のところでお示してございますが、社会情勢の変化や構造的課題への対応など、政策への強化を図ることといたしまして、一番下の四角囲みの中で、政策強化の方針として、この資料でございます「重点政策方針２０２４」を示すということを挙げさせていただいております。

この次のスライドは、この重点政策方針の中の政策強化の３つの柱を取り上げております。

この３つの柱のうち、一番左のダイバーシティ、こちらが人の分野の柱となってございます。

冒頭でも触れさせていただきましたが、都市の活力の源泉は「人」であるということで、「人」の力を高め、「人」の力を引き出す、「人」への投資を一層加速し、一人ひとりが主役になる社会を創り上げ、一番下段にございますもっと全ての人が輝く東京を実現していくものとしてございます。

繰返しになりますが、本日は、この「人」の部分、特に若者に関する部分についてご意見をいただければと考えております。

次のスライド以降は、今回意見をいただきたい分野に関連したページについて紹介させていただいております。それぞれ簡単に説明させていただきますが、１つ目が、子育てに関するページでございます。

ポイントをかいつまんで説明させていただきますと、出会いから子育てまでのライフステージを通じたシームレスな支援でしたり、経済的負担の軽減、また、子育てしやすい環境づくりなどを、強化のポイントとして掲げさせていただいております。

次のページへ行っていただきまして、２つ目でございます。

こちらは、子供や若者本人に向けた成長支援の施策でございます。

ポイントの２つ目の段落のところで書かせていただいておりますが、若者が輝いて

生きる社会に向けたサポートでしたり、一番下の段落、この部会のメインテーマでもございます、子供・若者の意見を政策へ反映させていくといったところをポイントとして掲げさせていただいております。

続いて、次のページ３点目です。

３つ目が、世界に羽ばたく若者の育成でございます。

一人ひとりの個性や強みを伸ばして成長できるような環境の整備、アントレプレナーシップなどの醸成などの人材育成、また、教育ＤＸ等を通じた教員の働き方改革などを掲げさせていただいております。

続いて４ページ目、４つ目でございます。

若者たちがポジティブに働くことができる社会の実現でございます。

女性の活躍の促進でしたり、ハラスメント対策、柔軟な働き方、賃上げの支援等、高い生産性とライフワークバランスの両立を掲げさせていただいております。

続いて、次のページへ行っていただきまして、５つ目でございます。

誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京の実現でございます。

性別や国籍、障害の有無等を問わずに、誰もが輝く共生社会の実現に向けた取組、また、孤独・孤立に悩む人を誰一人取り残さないということを、ポイントとして挙げさせていただいております。

今回、こういった挙げさせていただいたものは、こちらに参考としてお示しいたしました都としての強化の方向性として考えております強化の方向性でございます。今回皆様方におかれましては、若者関連団体の代表として、もしくは、一若者として、５つのテーマに係る意見をいただければと思っております。

事務局からの説明は以上でございます。

○土肥部会長　ありがとうございます。

それでは、次第３の意見交換に移りたいと思います。

前回から考えると、打って変わって、総論的というか、かなり大きなテーマでの議論になるので、落としどころいうのはそんなにないのかと思ってはいるんですが、それぞれの興味・関心や問題意識からご発言いただければと思っています。

まず、お一人ずつ５つのテーマについて考えていることですとか、ご意見をしてい

ただいて、その後、時間の許す限りで皆さんと意見交換とさせていただければと思っております。

特段希望がなければ、名簿順にと思ったんですが、荒井さんからですが、よろしいですか。

○荒井委員　はい。

○土肥部会長　では、お願いします。

○荒井委員　前回までの会議を踏まえたときに、前回までの議論というのが、どこに位置づくのかと思っていて、あらゆる若者の成長を支援みたいなところに、含まれるのかなとは思ったんですが、特に現場で活動していると、その成長の支援というのは、当然必要だなというので、そこに関しては同意ですが、成長の支援の一つ手前の命を守るみたいなところが結構あって、住まいの支援とか、居場所づくりとかに関しても、本当に命を守るような取組かと思ったときに、その命を守るみたいなところが、そのインクルーシブシティの文脈でも捉えきれないと思っていて、これまで話してきた議論が、どの枠組みに入るのかというところを、今一度確認したいなというところを、まず、最初に挙げさせてもらえたらと思いました。

○土肥部会長　分かりました。

では、順に、大橋さん。

○大橋委員　テーマが広いので、いくつかかいつまんでお話しできればと思います。

今回５つのテーマがあって、主に２、４、５とかのあたりをお話しさせていただければと思います。

まず、２つ目の部分の若者の声を聴き、あらゆる若者成長を社会全体で応援というところについて。これは、これまでもこの部会でも話し合ってきたことなのかと思っています。

いろいろ現場でやる中で、ここを何が一番これを考えたときに重要かということを考えると、若者がいかに頼れるとか、信頼できる大人、頼れる大人に出会えるのか、ここが一つすごく重要な部分になってくるのかと思っています。

そのときに、主に感じる課題として２つぐらいあるかと思っていて、１つ目が若者、高校生、大学生、社会に出てからいろいろつながれる大人というのが、ライフステー

ジによってかなり分断してしまうという課題があるんだろうと思っています。

育て上げネットは、よく高校に、定時制とか通信制の高校に行って、いろいろな相談をしたりとか、居場所づくりみたいなこともしているんですが、学校の先生方とか、すごく親身に高校生の話とかを聞いてくれるけれども、そこから卒業しちゃうとなかなか難しいであったりとか、その所属する社会がライフステージによって変わってしまうと、それが分断されることはあるのかと思っています。

あと、もう１つが、これは東京都のほうでもいろいろな取組、相談窓口とか、いろんな取組をされていると思うんですが、基本的に何か頼れる大人につながれるというポイントは、本人からの相談があったときという、待つ姿勢というのが基本にあるんだろうと思っていて、このライフステージによって分断されちゃうみたいな部分と、基本的には、こっちから行かないとつながらないというこの２つが大きな課題かと思っています。

そのときに、いくつかのポイントはあると思うんですが、まずライフステージを超えた形で、どうやって若者に伴走するのかというのが一つテーマになるかと思います。

例えば、私たちがやっている取組として、これがいいというわけじゃないんですが、私たちが今関わる高校の生徒さんに、卒業してから、ゴールデンウィーク明けてから６月ぐらいから夏、８月とか７月にかけて、高校生全員に電話をかけているという、ものすごくアナログなことをやって、今年も４００人ぐらいの電話をかけました。

これは、在学中にしっかり個人情報とか、もちろん同意書をもらって、電話番号をもらって、ゴールデンウィーク後にかけるということにしているんですが。

こうなったときに、例えば、就職した子が、「もう一週間で辞めちゃって今新しい仕事を探しています」という話があったりとか、あとは、「大学に行ったけれども、友達ができなすぎて辛いです。もう辞めたいです」みたいな話とか、いろんなことが出てきて。

中には、「だから今、高校の先生にこれから相談しようと思っています」という子もいたりし、自分から助けを求める力があって、すばらしいなあと思うんですが、今までは近くの高校の友達とか学校の先生とかそういう相談できる人がいたけれども、そこを離れてしまうと、そういうのがなくなってしまうというのはすごく感じていま

す。

そうなったときに、そこが変わったところを通り越して関われるような、頼れる大人というのにつながれていることが、すごく重要だと思うとともに、私たちの、ただ電話をかけるというのも、つながりとしては非常に弱いので、これをどうやって強化できるかというところは、すごく考えていく必要があるのかと思っています。

あと、もう一つは、私たちのところでは、高校で、例えば、進路がこれから不安という子たちに在学中からうちの就労支援の機関に通ってもらって、在学後もそのまま利用してもらうというような取組も、最近は、学校と連携しながら進めています。

これも、学校というところを離れたあとに新しくつながりをつくるというのは、すごく難しい中で、どう今実際に所属している間から頼れる大人、卒業してもとかそこを離れても信頼できる大人につながるかというのは、すごく重要な観点かと思っています。

ただ、そのつながり方としては、私たちはすごく課題を感じていて、先ほどの電話をかけるとかって、非常に困難があったりとか、最近では電話は基本的に出ないですし、つながるのも約３割ぐらいですが、そうなったときに、自分たちからどうプッシュ型、こっちからアプローチをするという方法について、いろいろ考えなきゃいけないのかと思っています。

そのときに、最近すごくおもしろい取組だと思っているのが、フランスのエデュケーターという仕組みです。

エデュケーターという児童とか子供とか若者に係る専門的な資格があって、主にソーシャルワークみたいなことをやっているんですが、すごくおもしろい取組が、自分達からアプローチをするときに、ＳＮＳを使って、何か気になっているような子達に自分達から連絡を取って、そのエデュケーターという人たちは、自分のフェースブックの仕事のアカウントとかを持っていたりするんですが、自分達からアプローチするみたいな、そういうネットエデュケーターというような役割があったりとか、あとはどこか支援機関で待つんじゃなくて、路上を回って、いろんな心配な若者に声をかけてソーシャルワークをするという、路上のエデュケーターというような役割もあるというようなことを最近知って、そういった取組、自分達からどうアプローチしていく

のかという取組をさらに進める必要があるかと思っているところです。これが、２番の部分です。

あと、次が５番ですね。最後の部分のインクルーシブシティ東京の実現、誰もが自分らしく生きるみたいなところで、誰もが自分らしく生きるというのを考えたときに、もちろん若者とかが何か成長して自分ができるようになるとか、何か力を身につけることも非常に重要だと思うんですが、今既に若者が持っているような、できることとかやりたいこと、福祉の世界だとストレングスと呼ばれるようなものだと思うんですが、そういったものから役割を見出して、いろんな人とつながりながら、自分らしく生きるというようなことは、すごく重要な観点かと思っています。

今若者が減っていく中で、若者がいるだけですごく価値がある存在もたくさんあると思いますし、そういった若者が、自分がやりたいとかできるというストレングスを活かしながら、地域の中とかでコミュニティというワードも出ていましたが、自分の役割を見出すというのは、すごく今後必要な取組かと思っています。

そのときに、地域づくりというのを考えたときに、今既にあるような公共施設とか、そういったことは一つハブになるのかと思っていて、例えば、それは図書館であったり、公民館であったりとかというのが地域づくりとかコミュニティづくりのハブになって、そこで若者が活躍できるという取組です。

特に、最近私たちがやっている取組でこれに近いと思ったのが、小学校をハブとした地域づくりみたいなことを、小学校と連携しながら進めています。

小学校で、一昨日とかは若者と一緒に畑作業していた、小学校の畑作業をして、そこに地域の高齢者の方とか、社協の方とかも来て、一緒に畑作業していたんですが、そこだと若者が、力があるみたいなだけで、ものすごく皆に「本当にありがとう、手伝ってくれて」と言われたりとか、その前の日とかは祭りで、それこそ、その前の週、祭りでみんなで神輿担いで地域の中で手伝っていたりしたんですが、そういうときも、若いというだけで、それだけですごくできることがたくさんあるし、自分にもこれだけ何かできるとは思っていなくても、地域の人に「ありがとう」と言われるという場があるんだと、若者が感じられたような場になっていたのかと思います。

でも、こうしたときに、いろんな多世代での交流ができて、そういった自分のスト

レングスが認識できるような場がつくれるといいと思っていて、一つの小学校とか中学校とか、今あるもの、図書館とかもそうですが、今あるものというのは一つのハブにしていくことが、すごく重要なポイントかと思っているところです。

最後ですが、４番の若者がポジティブに働くみたいなところで、ここは、先ほど説明していただいた資料でも、労働力不足が今すごくあるという中で、高卒の就職というところは、さらに私たちもサポートをどういうふうにできるかという力を入れていきたいと思っています。

今、本当に人が不足していて、私たちも高校に入って進路相談とかすることがあるんですが、求人とかでも、「４０年ぶりに高校に求人を出しました」みたいな企業も出てきたりとか、今まで高校生というのを求めてなかったような企業の方々も、そういったところに求人を出したりする企業も増えている中で、どううまく高校生と企業というのを、しっかりミスマッチなく、いい企業と若者が出会うことができるのかという取組がすごく重要かと思っています。

課題として、高校だと１人１社制の問題だとか、求人票の１枚だとなかなか情報が分からなくて比べられないとか。その中で、調査の中でも高卒の離職率がすごく高いという問題。特に企業を比べて選んでいないから、入ってから違ったと思うとか、そういった状況がある中で、どうしっかり、若者に情報共有しながら、１人１社制という枠がありながら、この枠をどうするのかという話もあると思うんですが、選択肢を届けられるのかというのは、さらに取り組めるかと思っているところです。

長くなったんですが、以上です。

○土肥部会長　ありがとうございます。

では、小奈さん。

○小奈委員　私自身もいろいろ考えまして、各テーマごとに全て意見をつくってしまったので、発言内容が多くなるのかと思いますが、よろしくお願いいたします。

子育てというところに関しては、私は若者支援をメインでやっておりますので、そこまで的を射た意見ではないのかもしれませんが、参考程度に捉えてもらえればと思います。

まず、１点目。子育てしやすい東京の実現といったところで、子育てに関する金銭

面に関しては、東京都さんの資料にありましたとおり、共働き世帯の支援や出産祝い金など、そういった施策があるため、今回は子育てに費やす時間的余裕という部分に関して考えていければと思いました。

これが、昔であれば、地域の関係性の中で、親戚とか近所の方に子育てを手伝ってもらうというようなことがあったと思うんですが、現実問題、そういったコミュニティの希薄になっているというところで、特に共働きにより子育てに費やされる時間は限られているため、子育てをためらうようになってきていると言わざるを得ないのかなと考えております。

今回、その解決策の方針として、地域で子育てをする支援というのを考えております。

より具体に言えば、公園の活用と管理体制の強化を通じて、子育て環境を整えるということを提案いたします。

東京都には、２３区内も多摩地域にも大小合わせていろんな公園が存在すると思うんですが、特に住宅街によく散見される小さな公園というのは、場所としては存在すると思うんですが、そういったところに管理人が配置されていないといったところに着目しまして、そこで、子供たちが初めて公園を訪れるとき、“公園デビュー”を地域全体で支援するというのを提案したいと思います。

例えば、親が時間的に公園デビューをサポートできない場合、地域の子育て支援課や保育園、町内会、ＮＰＯ法人など、どこが運営するのか分からないですが、それらがバックアップをして、子供たちが安全に公園を楽しめるよう支援をしていくと。

これは、本当に具体的な話になってきますが、忙しい親に代わって子供たちを公園に連れていく、公園のお迎えサービスみたいなものを実施して、そこに、例えば、地域のボランティアでシルバー層を取り込むことができれば、地域全体で子育てを応援する素地ができるのかと思います。

前回までの部会で、若者支援で居場所というような話がありましたが、子供にとっての居場所というところを考えると、公園というのは、ある種王道なのかなと考えております。

その公園を有効活用して、忙しい子育て世代の負担軽減に寄与できればと思います。

２番目の若者の声を聴き、あらゆる若者の成長を社会全体で応援というところですが、こちらに関しては、あらゆる分野を横断した支援システム構築ということが求められるかと思います。

そのためには、チューター的な役割を担う存在を設けることが重要と考えております。若者が集まりやすい様々なバリエーションの居場所的な空間を整備して、そこでキャッチした若者を、時間かけて個別に対応することが効果的だと考えております。

東京都でも様々な施策を打ち出しているかと思いますが、私共で言うと、八王子市の方で受託しております若者総合相談センターというのがありまして、こちらは１５歳から３９歳までの若者及びその家族を対象に、様々な悩みや課題に対応するための総合相談サービスを提供しております。

これに限らずですが、そういった進路、就労、社会生活における困難、ひきこもり、不登校など、若者が直面する幅広い問題に対応して、最終的に適切な支援機関への橋渡し、自立を促すためのサポートを行っております。

このように、地域とか教育とか高校とか大学とか、先ほど大橋委員からお話もあったかと思いますが、それに似ているのかと思いますが、そういったものに属する歯車的な役割が必要なのかなと考えております。

３番の世界に羽ばたく若者の育成というところですが、こちらは、様々な体験活動に幼少期から参加できるシステムを構築すべきと考えております。

昨今では、貧富の格差だとかいった問題がありますが、経済格差に関係なく、全ての子供が無料で利用できる環境が整うことを目指していきたいと思います。

遊びの中から人のつながりを円滑に実施できる素地をつくって、その中から様々な物事に興味を持ているようにしていくことが重要だと思います。

ただ、この解決策に関しては、①で述べました公園の活用のところで、様々なバックボーンを持つ地域の子供と触れ合うことが可能になると考えております。

さらに、そういった実体験の中から子供の特性が見えてくるので、そういった小さい頃の体験が進路選択にも大きな影響を与えるのではないかと考えておりまして、結果的に興味の分野があるということは、その後の進路選択において、有効になってくるのかと思っております。

次に４番の若者たちがポジティブに働くことができる社会の実現ですが、こちらは、まさに、私が普段仕事をしていて、若者たちと関わっているわけですが、私が関わっている若者は結構ひきこもりとか不登校が多いので、なかなかポジティブに働くということは、今までそういったことを意識もしてこなかったような人たちが多いです。

そういった子たちがポジティブに働くためにどうすればいいかねと問うたところ、要因は大きく分けて２つあるかと考えております。

１つ目は、どのようにキャリアを積んでいけばいいか分かること、２つ目は経歴に変化があっても、そこからキャリアアップ形成が分かるということかと思います。

経歴に変化というと、わりかしネガティブな変化、例えば、それが不登校ですとか介護ですとかいった部分ですね。

まず、１つ目のどのようにキャリアを積んでいけばいいか分かることというところですが、かつては企業が人を育ている余力があったかと思うんですが、現在の日本企業にはそういった余力が残っていないのではないかと見受けられます。さらには終身雇用制度の崩壊や、非正規雇用の増加、転職などによる人材流動性の高まりにより、雇用環境は変化を続けています。

そういった環境では、個人のキャリアパスに応じた育成というのが不可欠であると思いますが、しかしながら、個々人が明確に長期的なキャリアパスを見つけられるかといえば、そうでもないということが散見されます。

そのため、デジタルスキルやリーダーシップなど、各自の成長分野に応じたトレーニングを設定することが求められるとは思いますが、ただ、これも企業によってその余力がない企業さんもあるかと思うので、場合によっては若者支援の団体等の連携が必要になってくるのではないかと考えております。

２点目で申しました、景気に変化があっても、そこからのキャリア形成が分かるという部分ですが、特に、現代日本では道を踏み外したら終わりだみたいな、そういった意見も特に私が属している施設がそういう若者が多いのかもしれませんが。

特に、そういった１０代２０代の子は結構一緒に関わっていることが多いので、私自身、いやそうじゃないよと別にそうやって１つキャリアを間違えたとしても、こういうふうに持ち直すことができるよという、私個人ではそういうふうな働きかけがで

きるんですが、ただそれを、この東京都全体というところで考えたときに、それだけだと物足りないということで、一つ改善策として、学校、不登校とか、あと就労、それは介護なりひきこもりなりですが、そういったブランクがあった人向けに、例として、ロードマップや体験談などがウェブサイト等で分かるようにしたいと思います。

現在、ネットで自殺とか調べると、心の健康相談統一ダイヤルとかいったところに誘導されると思うんですが、そういった形でできれば、特定の単語検索、例えば、「不登校」とかを検索したら、そういう該当のウェブサイトが出るような方法などがいいのかなと思います。

それでも、例えば、自分の体験がそういったものに該当しないということであれば、特定の相談窓口の電話番号につながるといったように、段階を踏んで、いきなり相談窓口となりますとなかなか人材のリソースも割けないと思いますので、まずは、そういったような形で体験談やロードマップなどが分かるようになれば、よりよいのかなと考えております。

最後の５番です。誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京の実現というところで、こちらも２番で述べた内容と似ているかと思うんですが、相談所とか支援機関が現在多様化していると思います。ただ、その弊害とも言うべきものとして、どこに相談すればいいか分からないというような問題が存在するかと思います。

この問題を解決するためには、誰でも気軽に立ち寄れるような場所を提供して、様々な悩みや課題に対応できる窓口を設けることが重要かと思います。

例えば、地域若者サポートステーションは、年齢制限はあるものの、働くことに困難を感じている方であれば、誰でも利用可能となっております。これをより拡大して、例えば、東京都に住民票がある全ての人が利用でき、あらゆる分野の相談ができる総合的な相談所を設けることで、専門性が必要な分野にも対応しつつ、相談者が迷わないようにすることができるのかと思います。

専門的な支援というのは、すごく重要だとは思うんですが、それは、時に分断とか閉鎖的な対応を引き起こしてしまうという可能性があるので、そういった総合的な相談所がマザーシップとして機能して、各専門機関への橋渡し役を果たすことで、より包括的で効率的な支援が提供できるのではないかと思います。

そういうことで、長くなりましたが、私からの意見です。

○土肥部会長　ありがとうございます。

では、西山さん。

○西山委員　皆さんのお話がすごく充実しているので、私は、手短に。

普段、私が若者会議で活動している中で感じているところというところで、フリップのところでいくと、世界に羽ばたく未来を創造する人材育成ですとか、誰もが自分らしく生きるみたいなところは、ものすごく関わりが深いかなと考えていたのですが。

ここに書かれていることは、素敵だと思いながら拝見をしていまして、国際感覚を養うだったりとか、アントレプレナーシップを醸成するんだみたいな、すごくかっこいいことが書かれていると思いつつも、結構、現状だと、割と意識高い系みたいな、そういう印象をすごく受けるところがあると思っていて。

そういう格差的なところが起きてきているよなって感じがしてきて、意識高く、すごく優秀な学生たち、生徒たちは、例えば、「ビジネスコンテストに出ました」だったり、「留学行きました」という教育を受けている学生たちもいれば、そうではなくて、「普通に地道に学校の授業頑張ってます」みたいな子たちもいれば、その環境の違いによって受けられる教育だったりとか、教えてもらえることみたいなことが変わらないようにしていきたいなあというのを思っています。

アントレプレナーシップの醸成みたいなところでいくと、いろんな醸成のされ方みたいなところがあるんだろうなと考えていますし、もし、若者会議でも、「地域の課題がこれで、社会の課題がこれで、これを解決するために何かアイディアを考えましょう」みたいなことをやっているわけではなくて、それぞれ一人ひとりが、ワクワクすることとか、「ちょっとやってみたいんだよね」みたいなことを、みんなで実現させてみよう。「そうするためにどうしたらいいだろうか」というのをみんなで考えながら、いろんな人たちと連携しながら実現させていこうということをやっています。

そういう自分のワクワクとか、自分がやってみたいことみたいな自己実現というところから、どんどん一緒にやっている大学生、高校生、中学生とかを、本当にびっくりするぐらい成長しているなあというのをよく感じることがあって、そういった形で地域の中で、ただ自分がやってみたいことを実現するみたいな、それがポコポコ生ま

れていくみたいな、そういう継続的に、それができるような場を、仕組みをつくってあげるみたいなことが、きっと、誰もがどんな環境においても、例えば、アントレプレナーシップを醸成するんだとしたら、そういうやり方がきっとあるんだろうなあというのを、普段活動していてすごく感じています。

それを、いかにファシリテートしてあげるかどうかは、いかに継続的な場にしてあげるかみたいなところは、私がやっていても難しいところも結構あるなあと思っていて、そこは、東京都として、何かしらの仕組みがあるとか、支援があるみたいな形で進んでいくと、若者のためにもなるし、それは、そこで活躍、楽しんでくれている地域のためにもなるし、すごくいい仕組みができればいいと思っています。

具体的なところで言うと、大橋さんもおっしゃっていましたが、学校と連携するだったりとか、いろいろやり方はあるんだろうなということは思っていて、そのところについては気になっていますというところですね。

一旦、そんなところにしておきます。

○土肥部会長　分かりました。

では、與那覇さん。

○與那覇委員　私は、一人の二十代の独身女性の都民として、若者として、このテーマに対してどういう視点を重要視してくれたらうれしいかや，どういうところが課題になっているかを、いくつか挙げていきたいのですが、具体的な解決策がどうこうというよりかは、一つの視点として、お聞きいただければと思っております。

１番目の、子育てしやすい東京の実現ということで、小奈委員もおっしゃっていましたとおり、金銭面などにおいてでしたりとか、あと保育園とか、学童クラブとかの預け先については、東京都は様々な取組をされていると思いますので、どちらかというと保護者側がそのままお仕事が続けられるような、企業側のサポートが必要になってくるかなと、個人的には思います。

特に、障害児を持つ保護者の方から、一度伺った意見ですが、障害児の方が学校に通い始めるには、事前に保護者の方と打合わせが多かったりして、この休暇がすごく足りなくなるとかいった話を聞いたりすることがありました。お子さんを持つ世代のお母様お父様たちが、仕事が続けやすいような休暇制度や、テレワークの推進、フレ

ックスの働きの取組の推奨などが、もっと増えていくといいなと思っております。

飛びまして、４番の若者たちがポジティブに働くことができる社会の実現ということで、職場自体を、もっと居場所にしていく必要があるのかと思っております。現在コロナ禍から急速に会議等のインターネット、オンライン化などが進んできている中で、逆に、あえて対面で行ったりすることも必要になってくるのかと思っております。

正直、オンラインだと盛り上がらなくて話しづらいなど、対面でしか得ることができない人間性などを感じ得る場にもなると思いますので、何かを開催するときに、あえてオンラインにしたり、あえてオフラインにしたり、理由のある形で開催の制していくことが必要だと思いました。

最後、誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京の実現ということで、そもそも自分らしくとはというところからになってしまうのですが、近年はＳＮＳが普及して、他人の生活が簡単に垣間見えるような時代になってきた中で、他人と比較することで自分とはこうなのだろうと感じ、他人に対しマウンティングをする人も増えてきています。そういった面からも自己肯定感の低い若者が多いのかなと、個人的には感じています。

他人と比較した自分らしいではなくて、自己分析ができた上での自分らしくというのが大事かと思っております。若い学生のうちから、細かいところで目標設定をして、自己分析をする機会を増やしていくことが大切であると思っております。

進路の一環で自己分析をすることというのはあると思うんですが、普段から本当に細かいところから目標設定をしていく機会があるといいのかと思いました。

以上です。

○土肥部会長　ありがとうございます。

自分からもと思ったんですが。まず、全体を通じてというところで、全体を読んでいて、西山さんおっしゃったように、いいことがたくさん書いてあるんですが、何かが足りないなってずっと思っていまして。何かと思ったら、それは、都としての子供・若者の重点方針として考えたときに、子供の権利という考え方が欠如しているんじゃないかなとは感じました。

それぞれの施策の中では、論点ごとに重要なことが書かれているんじゃないかと思

ったんですが、子供ファーストといったときに、例えば、昨年の５月にソウル市が「子供中心都市」という考え方を発表していまして、それはまさに子供の権利を中心にした都市づくりをしていくということで、６つの重点施策をつくって、そこから落としながら進めていくとしているんですが、あわせて、「子供権利章典」というのを、憲章みたいな形で、ソウル市として定めて、そこから具体的な施策、例えば、遊びだったりとか、安全だったりとかというような形に降ろしていくと考えているんですが。

その権利性というのが上にあるかないかというのは、実はかなり政策的な方向性を変えてしまうんじゃないかなと感じていて、例えば、具体的な施策でいうと、子供子育て支援のところでも、僕、まだ、まとまりがないんですが、子育て支援という言葉自体に最近違和感があるなあと思い始めていて。

というのは、子育て支援というと、当たり前ですが、親が主体になるもので、そこにあまり子供の顔が見えてこないなという気もするんです。

だから、いろんな意見があって、これは人によって、子育てというのはいろんな考え方があると思うんですが、つい先日も子育て関係のＮＰＯの方と意見交換をしていたら、もう何十年もやられている方ですが、最近の親は、「最近の若い家族が、子供に愛を注がなさすぎる」といった趣旨の話を言われていて、言われることは一理あって、産んだら自治体がサポートしてくれるんでしょうみたいな感じに若干なっていて、

産んだらそこで終わりで、かつ子供がだんだん良くも悪くも道具化してしまっていて、ある意味で自分のいいように育てていくというか、そもそも親が子供に向ける眼差しが、子供が生まれれば、そこでいいというか、かつ自分の好きなようにそこで育ってほしいみたいな思いが強すぎるのかなと考えたときに、なぜそういう構造が生まれるんだろうというもののベースには、親自身が子供の権利というのを理解してないということからつながっているんじゃないかなと考えました。

かつ、自治体の支援策というのも、実は親に向けての施策になっていて、本当に子供の権利を保障する施策になっているかどうかというのは、改めて点検する必要があるんじゃないかなと考えたりもしていました。

僕もうまく言語化できてないものではあるんですが、そういう意味では、重点政策方針のＰＤＣＡを回していくときに、ちゃんと子供・若者の意見が反映されていくと

いうことも重要かと思っていまして、ソウルがいいというわけではないんですが、ソウルも最近始まったばかりですから。

ソウル市の場合は子供参加、韓国語なんで、僕はよく分からないんですが、「子供参加団」みたいな、小学生を百人集めて、それを６つの分科会に分けて、政策提案を毎年させるというような形で、政策のＰＤＣＡを回していくということをやられようとしていて、これがヨーロッパの諸国でやっていると、「ヨーロッパはすごいね」という話になるんですが、隣のソウルでそれをやっているということを考えると、東京都としても、もっと踏み込んだ子供中心の都市づくりということができるんじゃないかなと。

かつ、ソウル市はそこに子供の権利というのをちゃんと中心に据えているということが、僕はすばらしいなあと思ったところでもありまして、なので、そのあたりの権利という言葉はどこかしらで入れていただけるといいと思ったところではありました。

ということで、あとは、自由討議みたいな感じですが。

どこをどうしていけばいいかというのはあるんですが、ここまでで、皆さんそれぞれから意見を聞いて、刺激をされて発言をされたいという方とかいらっしゃいますか。

○栃折政策企画局計画調整担当課長　最初に、荒井委員からご質問いただいたお話で、前回までの議論の話がどこに入っているのかというところですが、荒井委員がおっしゃるとおり、意見をどういうふうに聞いていくのかという点につきましては、今、我々の想定の中では、この２つ目の若者の声を聴き、あらゆる若者の成長を社会全体で応援ということで、この３つ目のところで、抽象的な書き方になってしまっているんですが、声や思いを真正面から受け止めて、当事者目線に立った政策を通じということで、いかに若者の方々の意見を取り入れていくかというところを、取り入れていきたいということを書かせていただいております。

そこに、加えて、命の支援というところにつきましては、このあと、荒井委員もおっしゃっておりましたが、インクルーシブのところで、ここも「命」という書き方にはなってないんですが、３つ目のポツのところで、孤独・孤立に悩む人を、誰一人取り残さないというところで、そういった支援、先ほどの、バージョンアップ２０２４のころでも書かせていただきましたが、自殺対策とかというところで、こういったと

ころでしっかりやっていきたいというところは、含めさせていただいているところではございます。

それと、あと、土肥さんが言われた子供の権利章典の話ですが、実は都でも、ここでは書いてないですが、実は、チルドレンファーストという考えの中で、同じことをやっているところでございます。

子供の意見を聴いて、施策に反映させるというところ。ここには抽象的な話になってはおりますが、チルドレンファーストというところの考え方が、まさに土肥さんがおっしゃっていたような、子供中心のところで考えているところでございまして、

そこまで、その一つ前のところで子育てというところで、親世代に向けた支援というところと、子供に向けた支援というところで、項目を分けさせて、書かせていただいたんですが、そのあたりも、資料を後ほどお渡ししますので見ていただければと思います。

○土肥部会長　ただ、印象的な話になりますが、例えば、この見出しでいっても、「未来を担う子供・若者」となっていまして、社会全体で支えるとなっていて、もちろん未来を担うというのも事実ですし、社会全体が支えたほうがいいと思うんですが、本当に、チルドレンファーストと考えるのであれば、要するに、これだけ見ると子育ての支援がファーストと見えるのかと思うんですよね。

だから、チルドレンファーストで出てくる施策というのは、ちゃんと見ていないので分からないですが、選挙とかでも訴えられるので、票にならないというとあれですが、子供たちは投票できないので、親向けに都としては子育て支援を充実させていきますという話になっていったときに、そこの中での本当に当事者となる子供がそこに居るのかなというのは、もちろん、その下に声や思いを聴いてという、一緒につくっていくと書かれているんですが。

ちょっと印象的な話ではありますが。

○栃折政策企画局計画調整担当課長　ここにも書かせていただいているのがあったんですが、右上のところに、諸外国等における子供・若者の意見反映手法ということで、アイルランドとフィンランドと並んで書かせていただいておりまして、都でも今行っております中高生の政策決定参加プロジェクト、一例でありますが、中高校生の方々

に集まっていただいて、都の政策について意見を聞いて、出していただいて、最終的に知事に提案すると。もちろんこれで十分かと言われるとまだかもしれませんが、「こういうこともやっています」ということもご紹介させていただきます。

○土肥部会長　分かりました。ぜひソウル市も参照していただけるといいかと思います。

○荒井委員　５つのテーマを見たときに、先ほどの回答を踏まえてという形になるんですが、孤立・孤独みたいなところ、これまでも、かなり意見表明というところは、この若者部会で、若者の声をみたいなところはできたかと思うんですが、若者の領域においても孤立・孤独みたいなものはかなり深刻な課題だなというときに、特に困難な若者の声をどう拾うかみたいなところが、これまで重点的に会話してきたかと思う中で、このテーマをパッと見たときに、特に困難な若者をサポートする印象があまり見受けられないというところがあって。誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティの文脈の中に、孤立・孤独が入っているというのは、ちょっと違和感があると思うので、その２番目のところに、強調して加えていただくか、項目として１つ出すのかぐらい、しっかり取り組むんだという姿勢を示していただけると、これまでの分科会の声とかがちゃんと反映できたなという感覚が、私たちも持っているかと思ったので、そのあたりは一つ言っておきたいと思いました。

○土肥部会長　ほかの委員の方たち、何か。どうですか。

○上野政策企画局計画調整担当　こういった視点でお話を聞いてみたいというところで、計画調整課の上野と申します。

大橋委員から、若者がありがたがれるみたいなお話、その畑づくりとか、力を、若者がいるだけでもすごいようになったとかいう話があったりとか、小奈委員のお話の中で、その体験活動の話だったりとか、あとは、西山委員のお話の中で、地道にワクワクすることをやっていくということが生まれていくような、成功体験を積み重ねていくみたいなお話があったりとか、あと、與那覇委員のお話の中で、自己肯定感みたいなキーワードがあったりとかして、そこは結構重要な論点だと思っていて。

皆さんの活動の中で、こういうことしていく中で、若者とかの自己肯定感とか有用感みたいなところで印象的だったことがあれば、お話を伺えればと思いますがいかが

でしょうか。

例えば、西山委員の活動みたいなところで、どうやって若者とか入ってきてくれるんですか。どう活動して、人づてに見つけて入ってきてくれるんですか。

○西山委員　オープンスペースとか場を開いて、ワークショップを定期的に３回ぐらいのペースでやっているんですが、そこに新しい子たちが来てくれて、そこで「こういうことやってみたい」とアイディアを出して、そのまま活動になっていくような流れでやっているので、そういう場が継続的に開いていくということと、より多くの地域の若者たち、子供たちに知ってもらうみたいなところが重要だなと考えていて。

「ザリガニ釣りしたいんだよ」ということを言い出したことで、「じゃ、ザリガニグランプリやるか」みたいな感じで、実際、公園でそのイベントやるとなると、公園緑地課の許可もいるしだとか、「じゃ、これどうやって告知しようか」とか、「いろんな人が来てもらうためにどうしようか」みたいなことを一緒に考えながら、実際にザリガニ釣りをやってみて、「外来種駆除にも役だったよね、私たち」みたいな感じで、最後に振り返ってみて、また、次に続けていくみたいなことを。

○上野政策企画局計画調整担当　成功体験みたいな。

○西山委員　そういう小さい成功体験みたいなことを繰り返しながらやっています。

○大橋委員　いろんなことがあると思うんですが、一つあるのは、これも意見表明とか、もしかしたら関わってくるかもしれないんですが、自分の、ある意味ネガティブとか負の経験というのが、もちろん自分の意思において、誰かの少し役に立つとか、その経験自体がすごく貴重なものだと自分が感じられるみたいなところというのは、一つあるのかと思っていて。

自分は、いつも立川市で定時制とか通信制とか、高校生、私立、都立関係なくですが、合同学校相談会みたいなことを毎年２回やっていて、そこでいつも高校生とかに、その自分の経験、そういうところに通っている子というのは、不登校の子が基本的に多いですが、自分の経験とかを話してもらいながら、来てもらった中学生とか、保護者の方に、進路選びとかに活かしてもらうみたいなことをやったりするんですが。

そういうところだと、去年とかだと、話す人とか運営スタッフも含めて５０人弱ぐらいの子が手を挙げて参加してくれていて、そういう話をして、もちろんその話とい

うのは普通にものすごく貴重な話で、「自分のそういう経験が役に立つと思わなかったけれども、いろんな来た人とかにも質問とかしてもらえてとてもよかったです」というような声をいただいていて、自分のそういう経験というのが、社会の中でもものすごく貴重なものだと思っている中で、それが何か人の役に立ったとか、さっきの話にもつながるんですが、その子が何か今からできるようになるとか、何か成長するというのは、今持っているそもそもその経験とか自分ができることというもの自体が、すごく価値があるんだよというところが、分かるタイミングがあると思います。

当然、この辺りでも誰かにやらされるものというのは絶対なくて、本人の意志でというのはすごく重要な部分かと思うんですが、そこは一つあるのかと思っています。

○小奈委員　今の大橋委員がおっしゃっていただいた、負の経験という部分に関しても、私共でも、先日、青梅市でひきこもり児童の講演会がありまして。

そこに参加する方は、５０、６０、７０歳ぐらいの親御さんで、結構、ひきこもり、ニートとしては、ちょっと高齢な人たちの親御さんが、話を聞きにくるということで、私共の施設でも、今、ちょうど４８歳の「今まで引きこもっていました」という方がいらっしゃって、その人も本当に、「過去１０年ぐらい引きこもってたんで、もう本当に自信もないし、全然自分なんて」という感じではあったんですが、私のほうから「青梅市の講演会にぜひ来てほしい」と。

というのも、もちろんうちの施設を説明する上で、実際当事者がいたほうがいいというのも、それはそうですが、ただ、今、うちの寮の利用者さんに関しても、「あなたが経験したものというのは、他者にとっては、実は貴重な情報源だと。そうやって苦しんで必死もがいたというのが、もしかしたら、ほかの人の何か光になるかもしれない。なので、人を助けると思って来てほしい」と、私のほうから説得じゃないですが、促しまして、先日相談会で話してもらいました。

最後には、「結構出ていろいろ話せてよかったです」という話はありましたが、本当にそういった体験談がすごい重要だと思っていて、だからこそ、先ほど、意見で申し上げたように、そういったものを広めていく。

別に、ウェブサイトでもいいですし、相談窓口でそういったものをストックしていてもいいですし、ただそういう材料がないとなかなか、さっき與那覇委員の話があっ

たとおり、どうしても今ＳＮＳの普及によって、もう上か下かの縦でどうしても考えてしまうような若者が多いなと考えていて、勝ち組、負け組なんて話も出てきますが、じゃなくて、ほかにも道はあるよというのがいかに若者に周知できるかどうかというところが、話に対しての自己肯定感とかいった部分に寄与していくのかなと考えております。

○與那覇委員　自己肯定感というところに関しては、私は様々ことを経験する機会が多いほどいいのかと考えております。、調布市の児童館では、市内全体から小学校高学年から中学生を連れて２泊３日でキャンプに行くというようなことを行っています。

昨年行った子の中に、あとから知ったことですが、2 学期の感想文で「実は不登校だったけれども、このキャンプに参加したことで、２学期から学校に行けるようになった」というような声をいただいたりしていまして、もともと楽しそうだから行ってみる、キャンプしたかったから行ってみるというような機会がきっかけになって、自分の自信につながったりするのかと思っております。そういった機会が、その先ほど西山委員がおっしゃっていましたように、意識高い人だけが行くような環境ではなくて、学校などから誰でも行けるような機会がたくさんあるといいのかと思いました。

○土肥部会長　ありがとうございます。そうですね。

あとは、何か。

○栃折政策企画局計画調整担当課長　いろいろご意見いただきましてありがとうございます。

その中で、自己肯定感というところで、ご意見いただいたところだったんですが、若干視点が変わるんですが、今回、その新たな戦略をつくるにあたって目指すものとして、２０５０年代の東京の姿というところを目指していくというところが、一つ大きな視点としてあるんですが、こちらについても、皆様から意見をいただければと思っておりまして。

今から２０５０年というと、２５年後ですかね。２５年前と比べていくと、だいぶ時代も変わっている。例えば、技術とかも変わっていて、当時は携帯も全然まだ普及し始めたぐらいですかね。それと比べて、世の中多く変わっているところで、２０５０年がまたいろいろと変わっているような世の中になっているかと思うんですが、今

お話しいただいた自己肯定感のところ、最近だと小奈委員がおっしゃってたように、上下と比べてしまうみたいなところが、問題なのかと思うんですが、若者として、２０５０年代の若者がどうあるべきか。当然そのウェルビーイングな状態で統一がないとか、そうかと思うんですが、「もっとこうなっているといいな」みたいなイメージ、ざっくりとしたフワッとした感じですが、「５０年代の若者ってこうなっているといいな」みたいな、イメージというかご意見があると伺えるとありがたいんですが。いかがでしょうか。

○土肥部会長　はい。

○西山委員　我々も５０オーバーになっていますね。

○上野政策企画局計画調整担当　多分正解も間違いもない。

○栃折政策企画局計画調整担当課長　自由に思うところをお話しいただけると。

○西山委員　自分の子供たちがどういう若者になっているかみたいな。

○栃折政策企画局計画調整担当課長　そうですね。そういう感じですね。

○土肥部会長　誰でもいいんですが、最初からお一人ずつ行きましょう。

○荒井委員　テクノロジーの進化が一番影響が大きいのかと思ったときに、多分、人間の仕事の仕方がだいぶ変わったりしていく中で、ポジティブに働くみたいな表現もありましたが、そもそも人間がどう生きていくのかみたいなのが結構大きいのかと思ったときに、リアルなつながりの大切さが、さらに見直されるといいと思いますし、さっきの自己肯定感とかも踏まえるときに、所属するコミュニティとかが結構大事になるのかと思うので、いろんなリアルなオンラインでのつながりとか、多分いろいろ普及したりだとかしていくと思うんですが、多分人間が暮らしていく、家族みたいなコミュニティも、もう限界を迎えた先が２０５０とかだと思うので、その家族とか世帯とかという概念を超えて、もうコミュニティとか人とのつながりとか、その辺が柔軟になっていっているといいんだろうと思いますし、仕事とかそういう家族とかじゃない概念で人間が暮らしていく社会みたいなものを描いたときに、若者たちがどうあればいいのかなというのは、今考えられたらいいと思っていて、もっとポジティブに働く先に、もっと楽しく暮らせたらいいのかと思っていて、今って、大人があまりポジティブに働いてないじゃないですか。嫌そうに働いて、生きていくためにみたいな

ところがすごい強い中、若者にはポジティブに働けみたいなことを言っているみたいなのが終わるといいと思っていて、本当に生きていく最低ラインみたいなものは、テクノロジーを活用しつつ、もっと人間がそういう義務的な労働から解放されるとか、本当に好きなように暮らしていけるような、制約を取っ払えるといいと思うので、そういうコミュニティだったり、人とのつながりだったり、仕事だったり、暮らし方が描けるといいと思うので、その辺を見据えて今からどうしていくのかというのをつくれていけたらいいと思うので、個人的には、ポジティブに働くみたいなものをもう一歩進められるといいのかなというのが、今回のテーマにつなげるとちょっと思いました。

○土肥部会長　お一人ずついきますか。

○大橋委員　２０５０年というのはよく分からないんですが、荒井委員も先ほどおっしゃっているように、自分たちも今いろんな活動をしていて、本当にその孤独・孤立の部分というのは、すごく課題だなと感じることが多くて、コミュニティをどうつくっていくかという部分は、非常に重要だと思っています。

そうなったときに、もちろんコミュニティに属していることが生きづらさにつながるということは、当然あると思いますし、それは、それこそ昔の多分社会の中では逆に噂が全部地元で地域に広まっちゃうみたいなところでの生きづらさというのは、多分あると思うんですが、一つの方向性として、その住んでいる地域の中でとか、いかにその人と人との関係をつくっていくのか、そういうポイントをつくっていくのかみたいなものが、すごく重要かと思っています。

例えば、よく子供がすごく騒いでいて、知らない子だったら「うるさいな」だけれども、知っている子が騒いでいると「元気だな」と、自分たちの捉え方が変わるというような話とかがすごくあると思うんですが、それは何かしらの接点がないと、そういうような感じにならないし、今の社会だと、昔は多分、それが自然とできたところがあると思うんですが、何かしら、それは仕組みとしてそういうところをつくらないといけないのかと思っているので、そういうような人と人とが出会うみたいなポイントがたくさん広がればいいのかと思っています。

でも、そのときに、最初の話に立ち返るんですが、今自分たちがやっている小学校

を拠点とした地域づくりとか、今あるもので、今あるものというのはそこに関わることの心的ハードルがすごく低いなと感じていて、小学校に入るときに、「この場は危険じゃないか」と思っている人というのは、基本的にいないと思うので、今その何かある場で、地域の中で信頼できる場というのが、そういうハブになるとすごくいいと思っています。

さっきの子育て支援みたいな話もそうかもしれないですが、いろんな地域の人が関わりながら、子供が育っていくというところは、そういった人と人との関わりが増えていくことの中でも実現される部分かと思っているので、自分としてはその小中学校とか、そういうところが一つ拠点となって地域づくりができればなというのと、その地域づくりみたいなところは規模感みたいなのものがすごく重要なんだろうと思っていて、それが小学校区的に考えるのか、中学校区で考えるのか。

ただ、若者だと逆に、そういうような狭いところだとなかなか生きづらさを感じるみたいなところもあるので、そこは広域の連携も必要だろうし、テーマに応じたコミュニティも必要だろうしという、いろんなコミュニティが重層的にあるような社会だと、そこで苦しかったら抜けてほかのところへ行けるしみたいな、そんな社会があるといいなと、すごく抽象的ですが思いました。

○小奈委員　２０５０年というところを鑑みたときに、先ほどから話にあるような、例えば、貧富の格差ですとか、あとはコミュニケーションいう部分で考えていくと、どうしても所得層で分類されてしまうというか、そういった気がするので、これは若者支援にも言えることですが、本当に様々な人とか関わっていく、様々な人と関わることで、自分自身というものを知るという部分がすごく重要になってくると思います。

そういったところで、最初の意見になってしまうんですが、先ほど大橋委員は、中学校と小学校という部分のご意見でしたが、最初の、例えば、公園を活用したコミュニティという部分。

それはもちろん、子育て世代に関してのアプローチでもありますが、例えば、それが、じゃあ「高齢になってやることないな」とか「孤独だな」という人が、「じゃあ、ボランティアで子供の世話でも参加しようか」みたいな感じで参加できるとか。そこまで強い縛りだと、居づらさみたいなのがあると思うので、そういった形でゆるくつ

ながれるような場所というのがあればいいのかと思います。

特に、最近の若者の心理的な部分を考えると、そういう強いコミュニティみたいなのは、あまり求められてはいないのかなと。どちらかというと気楽なつながりのほうがいいとは思うので、そういった部分を意識して、この将来的なビジョンを考えていければと思います。具体的な意見ではございませんが。

○西山委員　すごいおもしろいワクワクする問だと思って。考えたこともなかったようなことを考えさせていただいていると思いつつ、私が「２５年後、こうあってほしい」ところを考えると、みんな伸び伸び生きていてほしいと思って。

今の小学生とか中学生というのはめちゃめちゃ忙しそうですよね。受験に向けて毎日塾に行ってとか、習い事に行ってとか。もっと遊べばいいのに、遊んでほしいなと、私は彼等を見ていてすごく思うところがあって、子供は子供らしく、若者は若者らしく伸び伸びと楽しむというのがまず大事だし、そうなってほしいなとまず一つ思うのと、もうちょっと上の世代、社会に出ていくような若者の世代も、今は大学卒業して、就職をして、大体同じ道を、「その道外れちゃうと」みたいな話も出ていましたが、その道をちゃんと辿らないといけないみたいなプレッシャーがある中で、それもどんどん外れていって、若者も伸び伸びと、暮らしていけるといいと思っているところです。

あとは、多分、もはや今の小学校とか中学校とか、学校の在り方も確実に変わっているだろうと思っていて。５教科をちゃんと月から金で昼間の時間にやってというのは、もう多分なくなっているんじゃないかなというのを、個人的には思っていて。

その辺は、必要な知識はちゃんと必要なときに入れつつも、地域の中で活動しながら学んでいくとか、何なら稼ぎながら学ぶみたいな、そういうことがもしかしたらできるんじゃないかなということも思っています。

伸び伸びと学びつつ、もちろん住んでいる自分の街に愛着を持ちつつみたいな形で育っていくという、自分の我が子を想像しながら考えてみました。

○與那覇委員　本当にざっくりとになるのですが、個人的には、温かい社会であってほしいなというのが本当に大きいです。

若者がどうこうという感じでもないかもしれないですが、自分の利益のために、

「こうだ」「こういうふうにしていきたいんだ」というところばかりではなくて、相手目線に立って動ける人が、若者が育っていくといいと思っています。

お互いがお互いに支えられて生きているのだなと思えるような人たちが育っていくといいのかと思いました。

○土肥部会長　この会議の部会長ということを意識した意見を言うと、２０５０年になっていたら、もっと子供、若者とか、小学生とかも、都の審議会の委員とかに入っているような社会になるといいなあと思ったりはします。

当たり前に子供とか若者が、参加とか意思決定に関われる社会になるといいと思ってはいます。

話が逸れますが、つい先週、国の専門委員会があって、国の審議会における１０代から３０代の委員の登用の比率が発表されたんですが、２０代で見ると、確か０．３％、１％行かなくて０．３％。３０代まで入れたらもうちょっと行けるかと思ったら、１．１～１．２％みたいな感じで、９８％が４０代以上の審議会の委員で構成されているということが結構衝撃的で、発表されたところだったんですが。

もちろん一概に原子力規制委員会とか、そういう専門的な議論の会議とかもあるので、若けりゃいいという問題ではないんですが、それにしても、３０代まで入れて１％というのは、かなり低いなと考えたときに、もう少し若い世代が入っていくといいなというのは、具体的なその数字がもう少し高まっていくといいと思っております。

あと、全然関係ない個人的なことで、もう少し働かなくていい、働くのは大切ですが、もう少し休みが増えるといいなというのは感じていて、最近週休３日とかも少しずつ始まりつつありますが。

都の職員さんもそうかもしれませんが、それこそ子供の活動をやっているこども家庭庁とか、国の組織を含めて、まず、公務員の方たちもすごく多忙で、自分の家族の生活とかよりも、仕事にとなってしまっている現状もあると思うので、ＡＩとかＤＸ、その辺がもう少し変わっていくといいんだろうと思ってはいます。

あと５分ぐらいになりましたが、どうでしょう、言い残しとかがもしある方、あるいは、事務局の皆さんがこれだけは最後聞いておきたいみたいなものがなければ、ちょっと早いですが、これで終わりにしようかと思いますが、よろしいですか。ありま

すか。大丈夫ですか。

どうぞ。

○荒井委員　これだけ若者がテーマになって、いろんな施策が動いているということに、すごく希望を感じるので、せっかくであれば、この重点政策とかも出るときに、東京都としても、もっと若者を応援していくんだというメッセージが伝わるといいと思ったので、せっかくこれだけ議論をして、これだけテーマに上がる中で、東京都としても若者にしていくという姿勢がもっとみんなに伝わるといいと思ったので、私もそういう期待感を感じていますし、その動きに少しでも貢献できたらなと思っております。

○土肥部会長　そういう意味では、あまり全体として関係ないことかもしれないですが、この「青少年問題協議会」という名称自体をどこかで見直すことが必要なのかと思ってはいまして、もう分かっているよということかもしれませんが、名称を変えておられるところもありますし、そもそも下の部会は、「若者部会」と言っていることもあるので、時代に合わせて、そこを変えるということも一つのメッセージになるかと思いまして。

今回の委員の意見を機に変わったとなることを期待したいと思います。

では、少し早いですが、今日出た意見を事務局におかれましては、今後の政策強化に向けて検討、ご活用いただくことをお願いしたいと思います。

また、これまでの部会の議論でも、行政が若者たちから直接意見を聴くことも必要という意見があります。このため、本部会のメンバーに限らず、積極的に若者から意見を聞くこともご検討いただきたいと思います。

最後に、次第の４、事務局からの連絡についてお願いいたします。

○山本若年支援課長　次回、第４回若者部会では、これまでの議論を取りまとめる予定でございます。既に日程調整をお願いしているところでございますが、決まり次第、開催日程をご連絡したいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、今お話が部会長からございました、他の若者からの意見等も、できるだけ多く聞いて、また皆様のご意見をいただければと思っております。

以上でございます。

○土肥部会長　ありがとうございます。

　それでは、これをもちまして若者部会を閉会いたします。本日はありがとうございました。

午前１１時２９分閉会